

## 伏気学説の文献回顧と分析

莊 明仁

台湾 瑞聯中医クリニック

伏気学説は、中医学の基本的理論の一つである。伏気概念は、「内経」により始まり、「傷寒論」中にも、「伏気」の言葉が見られる。その後、清代になると、伏気温病の学派に発展した。筆者は、「内経」、「傷寒論」、清代温病学派の「伏気」に対する認知はそれぞれ異なっていると考え、文献の回顧と分析を行った。

「素問・生氣通天論篇」には、「冬に寒に傷らるる者は、春に必ず温を病む。」の説がある。清代王孟英は、「温熱経緯」では、これを「内経伏気温熱篇」に分類している。一般的に医家の多くは、この見方をしている。しかし、「靈樞・論疾診尺篇」では、「四時の変、寒暑の勝、重陰は必ず陽、重陽は必ず陰。故に陰は寒を主り、陽は熱を主る。故に寒甚だしければ則ち熱し、熱甚だしければ則ち寒す。故に寒は熱を生じ、熱は寒を生ずと曰う。此れ陰陽の変なり、(後略)」と述べられている。この一節から考えると、「内経」は陰陽寒熱消長変化の常理を説明しているもので、古くは四時之序と称され、潜伏の病気であることを強調しているとは言えない。また、伏気という言葉は、『傷寒論・平脈法』にも見られる。「師曰く、伏気の病、意を以て之を伺うに、今月の内に伏気有らんと欲す。假令えば舊伏気有るは、當に須く之を脉すべし。もし、脉微弱の者は、當に喉中痛み傷るるに似たるも、喉痺に非ざるなり。病人云う、實に咽中痛む、爾りと雖も今復た下利せんと欲すと。」と伏気の病と証候について説明している。

さらに、『傷寒論・傷寒例』には、「陰陽大論云：(中略)中りて即ち病む者は、名づけて傷寒と曰う。即ち病まざる者は、寒毒肌膚に蔵れ、春に至り変じて温病と為り、夏に至り変じて暑病と為る。暑病は、熱極まり温よる重きなり。是を以て辛苦の人、春夏に温熱病多きは、皆冬時寒に触るるの致す所に由る、時行の気には非ざるなり」とある。邪気は、一旦身体に入った後、すぐに発病せず、春から夏に変わることで発病するものを伏気温病、暑病であるとし、流行病とは異なるものであると述べている。

しかし傷寒論では、伏気概念の詳しい説明がされていない。これは、当時ではよく知られた概念であり、詳しい解説が不要だったのではないだろうか。また一方で『陰陽大論』から引用された伏気と時行の気との間には、皮膚が伏邪を蓄積される部位であると考えるなど、「内経」や「清代温病学派」との差異が見られる。

温病学派は『傷寒論』は、冬に傷寒が即時に発病し、長い時間潜伏した後に温病として現れるという見方に疑問を呈している。例えば、葉天士『外感温熱篇』や『三時伏気外感篇』などでは外感温熱と伏気外感に分け、温病は伏気によって起きるとは限らないとしている。また、新感温病もあり、「温邪は上に受け、首先に肺を犯す。」即ち、伏気外感も辛散を避けることを強調しており、苦寒で裏熱を清泄すると陰液を守ることが主である。また、微悪寒などの表証がある場合には、先に辛涼清解を行う必要がある。

一方で『傷寒論』「寒毒肌膚に蔵れ」の説では、吳又可が『瘟疫論』で「邪伏膜原」を呈している。柳寶詒『温熱逢源』は、「其伏也每在少陰」などの異なる見方をしている。

このように、伏気学説にはそれぞれ異なった見方が存在する。整理すると、『内経』では陰陽消長、四時変化の理を重視し、『傷寒論』では「傳經化熱、伏気變温」の差異を論じ、温病学派では新感温熱及び伏気温病に分けられるなどの差異を見出すことができる。本稿では、伏気学説に関する文献回顧と分析を通して、それぞれの学説における「伏気」の概念を明らかにする。